子ども健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル：

Maternal factors and one-year-olds' screen time: A cross-sectional study using birth cohort data from the Japan Environment and Children's Study (JECS)

和文タイトル：

1 歳児のメディア視聴時間と養育者（母親）の要因の関連

ユニットセンター（UC）等名：京都ユニットセンター
サブユニットセンター（SUC）名：同志社大学赤ちゃん学研究センター

発表雑誌名：Journal of Children and Media
年：2023　DOI：10.1080/17482798.2023.2251162

筆頭著者名：藤井　まい
所属 UC 名：京都ユニットセンター

目的：

日本の研究では、1 歳児が未就学児の中で最もメディア視聴時間が長いことが報告されている。そこで、本研究では、エコチル調査のデータを利用し、1歳の子どものメディア視聴時間と主な養育者（母親）の特性との関連を評価することにしました。

方法：

母親が主な養育者である単胎児 86,938 人を分析の対象としました。メディア視聴時間は、母親が子どもにテレビ、DVD、その他のメディアを見せる時間と定義し、1 日 4 時間未満とそれ以上の 2 群に分類しました。メディア視聴時間と、子どもの性別、母親の年齢、学歴、メディアの利用、就労状況、外出頻度、母以外の養育者や相談者の有無、不安・抑うつ尺度（K6)と対児愛着（日本語版赤ちゃんへの気持ち質問票）のそれぞれとの関連を調べました。

結果：

対象の 1 歳児の 90%がメディアを視聴していました。多変量回帰分析の結果、母親のメディア利用が、1 歳児の長時間視聴と最も強く関連する要因であることが明らかになりました。母親の教育水準が高いほど、あるいは就労していると、子どもの長時間視聴の可能性が低くなりました。対児愛着（MIBS-J）の下位尺度である「怒りと拒絶」、及び「絆の障害」はごくわずかな関連を示し、子どもの性別、母親の年齢、不安・抑うつ尺度（K6)は子どものメディア視聴時間とは関連を示しませんでした。

考察（研究の限界を含める）：

国際的なガイドラインでは、1 歳児にはメディアを視聴させないことが推奨されています。既存の系統的レビューは、子どもの特性、家族や社会背景、民族性などが視聴時間に影響するとしていますが、本研究の結果は、子どものメディア視聴を禁止するのではなく、行動変容を促進できる実践的なガイドラインの必要性を示すものでした。また、母親がメディア利用をコントロールすることで、子どもの視聴を減らせる可能性も示唆しています。視聴時間に関する情報は 4 時間未満/以上として捉えたため、連続値による詳細な分析は行えませんでした。また、データは 2011-2014 年に得たもので、最新の傾向、特にコロナ禍による全国的な外出の自粛期間中の傾向は捉えていません。

結論：

1 歳児を対象としたこの大規模な調査は、子どもの長時間のメディア視聴の予測因子に関する知見に貢献するものです。いくつかの知見は先行研究と類似していましたが、異なる結果もありました。特に、本研究におけるメディア視聴時間は、1 歳児に対する国際的な推奨とは大きく異なっていました。